

雙林寺  
碑銘註

長壽寺

全

中村俊定文庫  
文庫 18  
645







序



此七碑の銘は、  
 名漢七人、  
 用ひ、  
 也、  
 建、  
 和、  
 惟、

七  
 人  
 名  
 漢











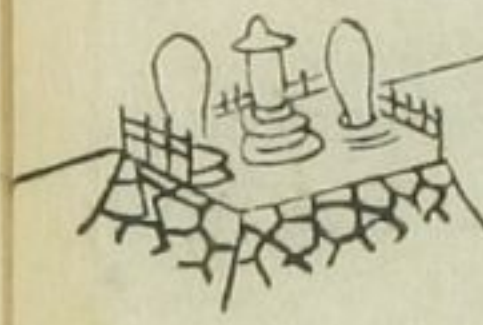




洛雙林寺圖



西行  
康頤  
頤阿



林阿弥

西阿弥

南阿弥

世尊翁碑

梅花佛

盧元坊

歸童仙

臆庵

梅花佛碑

雪姑庵









下ノ子載ル名ヲ控ニテ  
以得ル事ヲ記スル  
事

皇路

皇路ノ事ヲ記スル  
事

皇路ノ事ヲ記スル  
事











まゝに  
うらみをお通の韻と用て注文の中  
首尾の韻をあらわすこと  
假名よし韻をあらわすこと  
まゝに  
古事記の韻をあらわすこと  
かゝるの韻をあらわすこと  
昔の韻をあらわすこと

まゝに  
あ  
先解  
まゝに  
まゝに  
まゝに  
まゝに  
まゝに  
まゝに  
まゝに  
まゝに













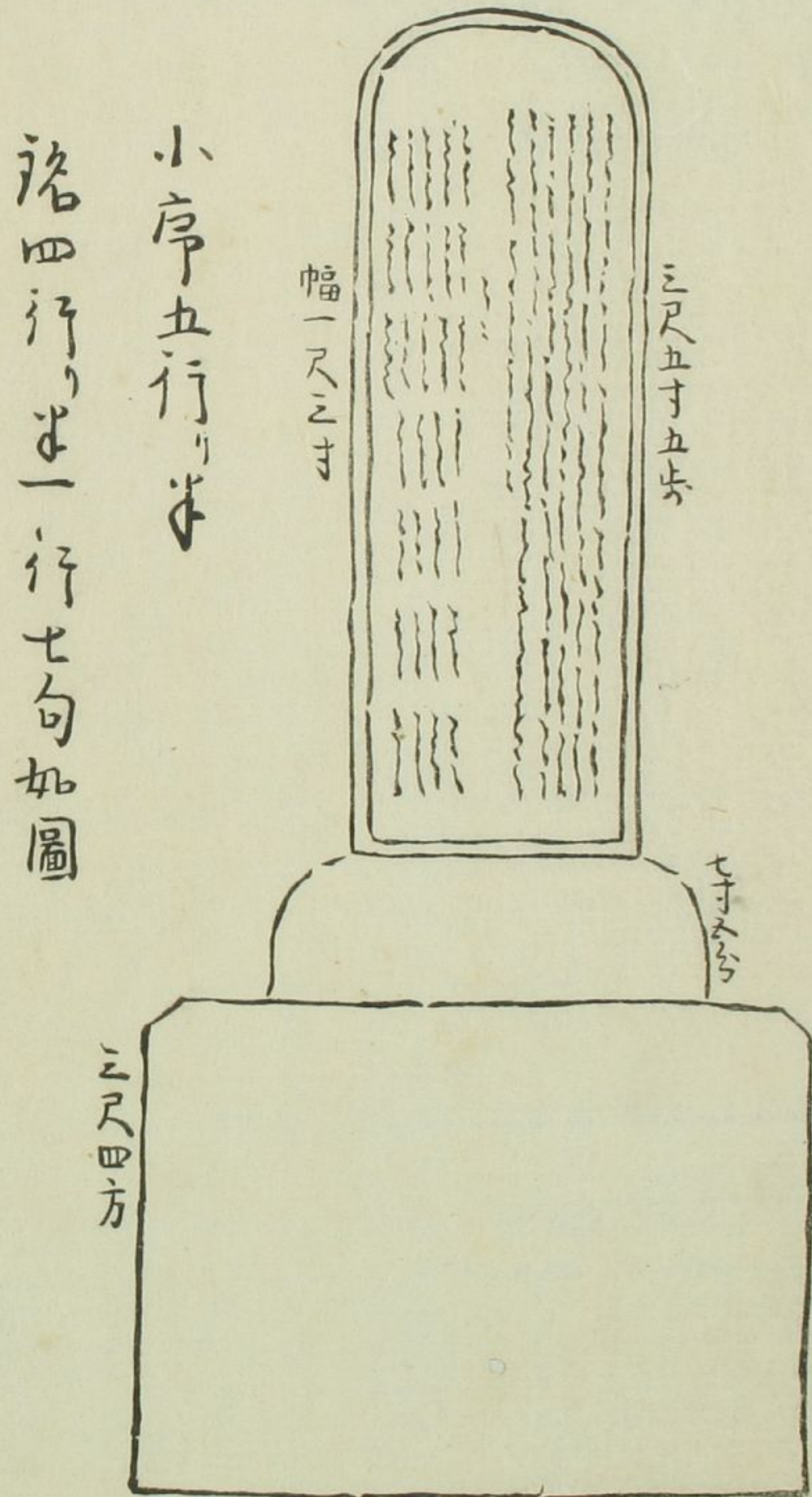






石碑之圖

高六尺八寸 上ハ和泉石下二重ハ白河石



梅花仙碑銘 小序

儒ノ曾参あり仙ノ迦葉あり仙ノ  
 東と仰あり仙ノ名譽の國ハ縣の善は  
 夫ノ文也の才とてけり其ノ由は  
 是を在るの光とかけり其ノ由は  
 何れハ白鳥の再振を交りてハ和  
 平の世に在るの世なり其ノ由は  
 論決の注とて七子の後りて







深き水に 草のあや ちかたなる  
ふれをてし 白いよふ きの色し  
浦にありし 若の世の 人よあして  
十美 里 解の教きて そのあて  
世よあはれ 今もあは 長徳はあ  
月よあはれ

碑陰銘  
維石不言  
教贖復傳

注二日

儒より考

孔子新世の教誡もさるる世並にあり弘  
まう直道の徳も 柳子房もさるる世並にあり

心縣の考

心縣の考は 柳子房の二祖ありしなり  
心縣の考は 柳子房の二祖ありしなり

文見の考

文見の考は 柳子房の二祖ありしなり  
文見の考は 柳子房の二祖ありしなり

蓮二吟 年未改  
行 享保 年未  
四月七日 柳子房  
本古 柳子房  
小 有 是 柳子房  
考 柳子房  
寛永 年未  
生 柳子房

柳子房の考は 柳子房の二祖ありしなり  
柳子房の考は 柳子房の二祖ありしなり



本澤の功

清治三十八年... 所撰以勸愛者也... 能事... 未む西土の... 赤岡の... 十一... 多... 弘...

荻原の光

流... 知... 減... 後中...

いぶの鑑屋

いぶの文... 一... 文...

白鳥の再撰

白鳥... 漢...

大和詞の口美

大和... 口美...

徒然の禱

徒然... 禱... 文...







必俟して首尾の末尾の事しらざるは極よ行とす  
まゝのこゝろとあつては句と祿せざるんや

け師の心伝

け師の心伝 け師の心伝の心伝なりてその心伝と句  
首尾の終も始も終も心伝の心伝なりてその心伝と句  
と裁入るる心伝なりてその心伝の心伝なりてその心伝と句  
け師の心伝の心伝なりてその心伝の心伝なりてその心伝と句  
まゝのこゝろとあつては句と祿せざるんや

愧の凡悟

愧の凡悟 愧の凡悟の凡悟なりてその凡悟の凡悟なりてその凡悟と句  
まゝのこゝろとあつては句と祿せざるんや

あけを安士の首毛より列し色々の穢之知し  
弓馬の余力より凡悟と悟し中身の凡悟なり  
門に入つて凡悟の凡悟なりてその凡悟の凡悟なりてその凡悟と句  
人の凡悟なりてその凡悟の凡悟なりてその凡悟の凡悟なりてその凡悟と句  
まゝのこゝろとあつては句と祿せざるんや

怒諸予又向愧枯為薪邪曰我之憂愧也且視而冬



















清くは龍虎のふとて死なつてまはさるる  
けしきもまたはの月とてて織女の泣き聲  
とていふはなほの御心もあはれとて  
碑とていふはなほの御心もあはれとて  
注中原文はなほの御心もあはれとて  
多分はなほの御心もあはれとて  
とていふはなほの御心もあはれとて  
とていふはなほの御心もあはれとて

碑陰

效臆とてなほの西施ぬいりて頻其里里之醜人見  
而羨之歸亦悻心而頻其里里之醜人見  
不知其年之所以羨臆之頻其里里之醜人見  
とていふはなほの御心もあはれとて  
とていふはなほの御心もあはれとて  
とていふはなほの御心もあはれとて  
とていふはなほの御心もあはれとて  
とていふはなほの御心もあはれとて







仰之碑モ磨亦以二月七日而可有墨  
直之式鳥不共左有者三月十二日  
尔以其碑之筆之次午而特直此碑  
之墨尔者事之便磨有宜要然則  
於其日其席而有思梅老仰之冥加  
居欲殺其高思了人別を奚方些磨  
不及新新其文字而令揮其德給些

是從本所塊身之徒之希也乍去向  
諸君而以塊身之作碑而斯迄及  
墨直之沙汰則何與耶要推吾解而  
為潛龍解了樣也則殆所聞過量了  
其碑者是梅老仰之碑也尔者豈  
可論文章之巧拙拍干作者之名乎  
見人丈斯案此好匹々磨有厚信之



人而不絶、流醉墨之香、而永難波之  
花與俱、尔吹傳地梅之白也、則正風  
繁榮之基也、正依而以其夏而為地  
抄之跋而已

宮左江



書林

紀府新通三町

加世田屋平右衛門

京都寺町二条

橋屋治多傳



